

ヌエボ・レオン棟の叫び

——被災者の声から——

1960年代メキシコ市に建設されたトラテラルコ住宅団地。
このラテンアメリカ最大の団地には、斬新な中高層住宅が立ち並んだ。
中でもヌエボ・レオン棟の美しさは、世界の建築家が賞賛した。
1985年9月19日、そのヌエボ・レオン棟が、無残な瓦礫の山と化した。

コンスエロ・ロモ・カンポスさんの話

カンポスさんはメキシコ市から約800km離れたマサトラン市に住む女性。ヌエボ・レオン棟には妹が暮らしていた。しかも地震当日、カンポスさんの娘と3人の孫が妹を訪ねていた。

トラテラルコ団地のヌエボ・レオン棟倒壊のニュースを見て、私はマサトランから必死でやってきました。お金があまりなかったので大変でしたが、何とかたどり着きました。ヌエボ・レオン棟のCブロックが崩れ落ちているのを見た私は、本当に絶望を感じました。そこには、私の妹が住んでいました。しかもその日、私の娘と3人の孫が妹を訪ねていたのです。まる1週間、私は食べもせず寝もしないで、木の上にしがみついて私の家族が救出されるのを待ち続けました。

周りを見ると、同じように肉親を捜し求める母親たちがいました。それを見た私は、自分の空腹などに構ってはられない、そして「何かできることを探さなければいけない」と自分に言い聞かせました。そこで私は兵隊さんや作業員の人達、それに肉親の救助を待ちわびる人達に水を運びました。やがて皆さんは食料を配って欲しい、と私に頼みました。私は元気が出てきました。きっと自分の家族が救助されるという希望も沸いてきました。どこか狭い隙間の中で私の家族が生きていてくれることを夢に見ました。

水を運び続け、希望を持ち続けたかったのですが、1日1日と時間が経ち、もう救出の可能性は無くなってしまいました。誰一人生きてはいないでしょう。私は妹を失いました。妹の名前はエステラ・ロモといいます。娘と3人の孫も失いました。私は家族すべてを無くしました。家族は私がこの世の中で持っていたもののすべてでした。その家族はもういません。私にはもう何も、誰も残されていません。私はこの世でひとりぼっちになりました。ひとりぼっちで泣きました。でもそれは私だけではありま

せん。だから搜索作業を手伝わなければならいと思ひました。泣きながら水を運びました。必死で水を集めて運び続けました。だって誰かがやらなければいけないでしょう？それに食べ物も配ってあげなければ。

ヌエボ・レオン棟には、世界的オペラ歌手プラシド・ドミンゴさんの親戚が住んでいた。このためドミンゴさんも救助作業に加わっていた。ドミンゴさんは、必死で水と食料を運び続けるカンポスさんの姿に気づく。

トラテロルコ団地で救助作業を指揮していたプラシドさんは、私に気づいて下さいました。そして私をボランティア・リーダーに任命して下さいました。その上、ボランティア・リーダーであることを示す ID カードまで用意して下さいましたのです。私はその ID カードをエプロンのポケットにしまっております。それから作業員の皆さんが私に手紙を書いて下さったので、それもポケットにしまっております。この ID カードと皆さんからの手紙は私の宝物です。その宝物がポケットの中にあるお陰で、私は作業ができるのです。私は皆さんのつらい気持ちが分かります。頭ではなく体で感じています。私が身を引きちぎられるような思いをしたように、皆さんもつらい思いをしているのです。ですから私はボランティア活動に今まで以上に必死になりました。この作業を愛してさえいます。行っては来て、来ては行って、運んで、集めて、配って、食べ物を作り、お湯を沸かし、コーヒーをたて、炭酸水の瓶を開けて、できることはすべてやっています。救助現場を箒ではいて掃除し、ごみを拾いました。崩れたレンガやブロックも運びました。

必死の救出活動もむなしく、カンポスさんの妹、娘、3人の孫、ドミンゴさんの親戚4名をはじめ、数百名の命がヌエボ・レオン棟において失われた。

ロウルデス・カルバリノさんの話

(国立専門教育学校・舞踏科の女性職員：当時 28 歳)

私は都心のエクアドル通りに面した家に住んでいました。私の家はどうにか倒れずにすみしました。ヌエボ・レオン棟には私の恩師で、モダンダンス・グループ「ラ・ルエダ」の監督のカルメン・カストロ先生が住んでいました。朝 9 時にヌエボ・レオン棟の倒壊を知った私は、家を飛び出して駆けつけました。無残な瓦礫を前に、私は「カルメン先生！」と叫びました。カルメン先生は、夫で作曲家のレオナルド・ベラスケスさん、それにアドリアン君、ガブリエル君という二人の子供と暮らしていました。他にもヌエボ・レオン棟には、照明技術者ホセ・サンドバルさん、舞踏家のホルヘ・サンチェスさんが住んでいました。幸いホセ・サンドバルさんは友人の家に泊まっていたので無事でした。

朝 9 時、ヌエボ・レオン棟では「あそこに人がいるんです！助けてください！」という叫び声が聞こえていました。

私は瓦礫のまわりを歩きながら「カルメン先生！ホルヘさん！」と泣き叫びました。「あなた、どうか大声で叫ばないで下さい！」誰かが私に言いました。「何か道具を持ってきてください！」

その人の言うとおりでした。私は学生時代に登山部に所属し、ダイビングの経験もあったので、「私が知ってることは、きっとここで役に立つわ」と自分に言い聞かせました。

私は 6 ブロック先にある家に戻って道具を持ち出し、再び倒壊現場に走りました。しかしどうやってこの巨大な残骸の中に入っていけばよいのか分かりませんでした。ガスの臭いがしました。地下のガス管が爆発するかもしれないという人もいましたが、私は構わずに瓦礫に穴を掘って潜り込みました。

瓦礫の中で再び「カルメン先生！ホルヘさん！」と叫びました。
答えはありません。

「カルメン先生！ホルヘさん！カルメン先生！」
声がかかるまで叫び続けました。「大丈夫ですか？どうか教えてください……」

すると女性と子供の声がしました。「ここで動けずにいます、誰か助けてください！」

私は声のする方へ這っていきましたが、隙間が狭すぎて近づくことができません。いったん外に戻って、別の人に救助を頼みました。私は別の場所から穴を掘って、叫び続けました。「カルメン先生！カルメン先生！」尊敬する先生を見つけられない悔しさと無力感に苛まれながら、ただただ叫びました。私は巨大なコンクリートの床板を見ながら「だめだわ、こんな大きな床を持ち上げることはできない」とつぶやきました。午後3時、私はもう声が枯れて、叫ぶことができませんでした。

機械がなければ到底コンクリート床を持ち上げることができません。クレーン車が必要でした。

午前中、11時頃にはまだ生存者が救出されていましたが、午後になり遺体となって運び出される人が出てきました。その頃になり、私はカルメン先生やホルヘさんが亡くなったのではないかという予感を抱き始めました。

その後、カルバリノさんは友人や同僚と市内の複数の遺体安置所を訪ね回るが、カルメン先生やホルヘさんを見つけることができない。遺体安置所には肉親や知人を探す人で長蛇の列ができていた。

死体そしてまた死体、子供たち、女の人、男の人。その中でも目に焼きついて離れないのは老いた女性の遺体でした。体は完全につぶれていました。しかし顔は驚くほど穏やかで、まるで夢を見ながら眠っているようでした。

カルバリノさんは必死で遺体安置所を訪ねる。収容された遺体は防腐処理のため、猛烈なホルマリン臭を放っていた。安置所で遺体を探していた地震翌日の夜19時38分、大規模な余震が起こる。安置所はパニックとなり、逃げ惑う人々が将棋倒しになる。

翌々日、カルバリノさんは学生時代の登山部の仲間とともにフアレス病院の倒壊現場に救助ボランティアに駆けつける。フアレス病院には多数の妊婦や新生児が閉じ込められていた。瓦礫の中から聞こえる赤ん坊の泣き声に、カルバリノさんは激しい恐怖感に襲われる。

家に戻ったカルバリノさんは大声を上げながら泣き伏す。夜中、午前3時頃、カルバリノさんの姉ダリアさんは、ベッドで寝ているはずのカルバリノさんを見て仰天する。目を見開いたまま、死体のようにベッドに横たわっていたのだ。ダリアさんがカルバリノさんの体を揺さぶると、カルバリノさんは目を覚ました。ダリアさんはカルバリノさんを病院へ連れて行く。医師はカルバリノさん極度の緊張に耐えられない状態にあると診断し、薬を処方して、安静を保つよう助言する。

地震から4日後、専門技術者がカルバリノさんの家を訪れて耐震診断をする。その結果、家が非常に危険な状態であることを知らされる。カルバリノさんの家族は荷物をまとめ、親戚の家に避難する。

地震から5日後、カルバリノさんのもとに、カルメン先生の夫のレオナルドさん、息子のガブリエル君、アドリアン君が無事であるという知らせが届く。しかしカルメン先生だけは依然行方不明で、息子のアドリアン君がヌエボ・レオン棟の前で、遺体捜索作業を見守っているという。カルバリノさんはヌエボ・レオン棟に行き、アドリアン君とともに朝7時から夕方6時まで捜索作業を見守る。

もし遺体の身元が確認できないと、他の遺体とともに共同墓地に埋葬されてしまう。それだけは避けたい。たとえカルメン先生が亡くなっても、せめて遺体だけは確認したい。しかしカルメン先生は見つからなかった。

その夜、親戚の家に戻ったカルバリノさんは、友達の一人に電話をする。

「カルメン先生が見つかったわ。」
電話の向こうの友達が言いました。

「生きてるの？」
私は尋ねました。私の心臓は胸から飛び出るほど暴れ、体中の血が沸騰するようでした。もしかすると先生は郊外に避難しているかもしれない！どこかで生きていないかもしれない！

「亡くなったわ。」
友達が言いました。

「先生はどこ？行かないと……」

「落ち着いて。先生は共同墓地に埋葬されたわ。」
友達は答えました。

私と私の友達、同僚、先生の夫と息子さん、30人がかりで必死に探したのに、私たちの誰一人として先生の遺体を確認できなかったのです。

私は自分を問い詰めました。これまでしたことの全てが無駄だったの？そんなことがあっていいの！？あのカルメン・カストロほどの女性が、デルタの安置所でもなく、コユヤの安置所でもなく、他のどの安置所でもなく、共同墓地に埋められるなんて。

この 10 年、生徒たちのダンスグループを必死で育て、自分の時間を投げ打って生徒に尽くしてきた先生が共同墓地に？

なぜですか、神様？

私たちには先生を見つけるための眼が付いていなかったのですか？ 搜索するための頭がなかったのですか？ 瓦礫を見つめずに泣いてばかりいたのがいけなかったのですか？

カルメン先生、もしあなたが生きていて下さったら……。きっと先生は授業のあと学校に残って、私たちにどうやって踊るかではなく、どうやって生きるかを教えてくれたでしょう。いつもそうしてくれたように。そしてミルクかワインを飲みながら私の悩みを聴き、よいアドバイスをしてくれたでしょう。先生に歩み寄り、私の心の内を打ち明けることができたでしょう。「カルメン先生、分かるでしょう、私はすごく落ち込んでるんです。あんなこと、こんなこと……」そして先生は私の言葉に耳を傾けてくれるのです。その先生が、あのカルメン・カストロが、共同墓地で人生を終えたのです。

先生は決して人の人生を挫くようなことをしなかったのに、地震が先生の人生を、命を挫いてしまったのです。

先生は共同墓地に埋められました。他の身元不明の人達とともに。5 日前の地震のあと、皆が市内のあらゆる場所を探し続けたというのに。

ホルヘさんも同じでした。ヌエボ・レオン棟の瓦礫から運び出された遺体の多くは身元が確認できず、すぐにドロレス共同墓地に埋葬されたそうです。ホルヘさんの親戚は墓地へ行き、そこでホルヘさんが地震の前日に着ていた服を見つけたそうです。同時にホルヘさんの親戚は、小さなハートのブレスレットをつけた遺体を見たそうです。そのブレスレットはカルメン先生が付けていたものと同じでした。しかし、その遺体が本当にカルメン先生のものだと、一体誰が言い切れるのでしょうか？

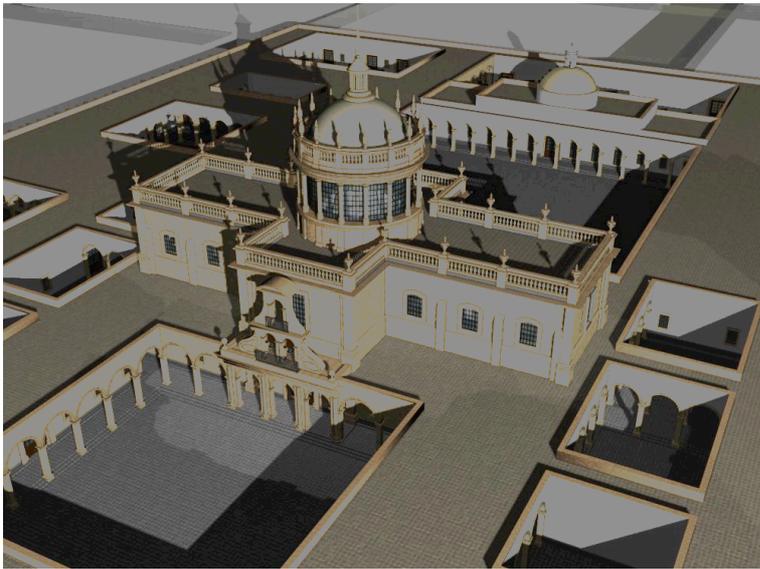
共同墓地への埋葬は、衛生上やむを得なかったのでしょう。多分カルメン先生もそこに埋葬されたのでしょう。そしてどれほど多くの人々が先生の隣に眠っていることでしょう。

出典：Nothing, nobody : the voices of the Mexico City earthquake / Elena Poniatowska ; translated by Aurora Camacho de Schmidt and Arthur Schmidt. Temple University Press, 1995. -- (Voices of Latin American life).

メキシコ近現代建築紹介

———苦難の歴史が育てたメキシコの建築———

16世紀のスペイン人襲来以来、メキシコは災厄の連続。
アステカ帝国滅亡、植民地収奪、疫病、独立戦争、革命、震災などなど
富者も貧者も死と隣あわせ。
苦難の歴史が、かえって豊かな芸術と建築を育てた。



世界遺産：カバーニャス孤児院
(1806～1829)

ホセ・クレメンテ・オロスコ
1883-1949

旧カバーニャス孤児院：1806 着工～1829 完成
カトリック司教：フアン・ルイス・デ・カバーニャス (?～1823) が建設。
マヌエル・トルサ (1757～1825) 設計
京都市の姉妹都市グアダハラハラにある。
新古典主義様式の傑作。
当初は病院，養老院をかねていた。
子供，老人，患者の使い勝手を考慮して1階建。
現代ほど徹底していないが，バリアフリー思想に基づく設計。
1939年，画家オロスコが，建物内部にメキシコの歴史をテーマとするフレスコ画を描く。

保守的なカトリック司教が建てた建物に，急進的思想を持つ画家の壁画：なぜこんな組合せが？

その背景：1910年メキシコ革命

- ・ 20世紀初頭、メキシコの政治は腐敗し、貧富の差が拡大。
- ・ 1910年、メキシコ革命。貧困は改善し、経済も発展。
- ・ 革命の理念を民衆に伝えるため、建物という建物に美しい壁画が描かれる。
- ・ 1985年地震で被災した通信運輸省庁舎：モダニズム建築と壁画が融合した傑作
- ・ メキシコ国立自治大学：壮大な校舎群と巨大な壁画で有名
- ・ 1950年代以降、壁画はあまり描かれなくなり、代わって簡潔でメキシコの風土と調和した建築が現れる。
- ・ アステカ時代の遺跡、スペイン植民時代の教会に隣接していたヌエボ・レオン棟はその代表例。

ルイス・バラガン（1902-1988）：現代メキシコで最も著名な建築家

- ・ サテライトタワー(1957)
- ・ 世界遺産：ルイス・バラガン邸（1948）
- ・ ヒラルディ邸（1975-77）
- ・ ロス・クルベスの噴水
- ・ トゥラルパンの礼拝堂（1953-60）
- ・ ラス・アルボレーダス住宅地(1957)

フェリックス・カンデラ（1910-1997）：構造建築家

- ・ 双曲面スラブ要素のコンセプト：力学解析に基づく建築デザインを追究した。
- ・ 聖ガダルルーペ教会(1958-59)
- ・ メキシコオリンピック競技施設(1968)
- ・ オーシャン・グラフィック(1994-2002)

20世紀に開花したメキシコ現代建築の背景には、壮麗な教会の建設によって培われた技術があった。

- ・ 16世紀のスペインによる征服後、先住民はカトリックへの改宗を余儀なくされる。
- ・ しかし苦しむ先住民を助け、横暴なスペイン人支配層に反旗をひるがえすカトリック聖職者も現れる。
- ・ カトリック教会は次第に国民の信頼と尊敬を得る。

- ・ 世界遺産：メキシコ市歴史博物館
- ・ メキシコ国立芸術院
- ・ ソカロ（国家宮殿）
- ・ 旧メキシコ市中央郵便局
- ・ グアダラハラ大聖堂